釣れ釣れなるままに

２００１年思い出の釣行記 PART.　３

鬼岩のお化け

鹿島釣狂

釣遊会第４回大会

☆開 催 日　平成１３年７月２２日
☆開催場所　干平～音調津港
☆入釣場所　谷磯
☆潮　　満潮　０２：４６　１５８㎝
　　干潮　１０：２３　　－８㎝
☆釣　　果　ハゴトコ　２９７　㎜　４
　　カジカ　　１７８　㎜　１
　　重量　　１２７　０ｇ
☆成　　績　合計　　６０２　点
　　成績　　１９　点
　　持ち点　　１７　点
　　累計点　　８９　点

大漁祈願

今年度から替わった親分が、職場に送り届けられた「北海道のつり」を手にしたことから釣り談義に花が咲いた。さらにその話に自称釣り師が加わり「後ろ手に縛ってから聞け」という釣り人の法螺話が続いた。

その内の一人が６月２１日に雄武沖の舟釣りに出掛けると言い、同僚に誘惑の触手を伸ばす。親分にもお誘いの言葉が掛かり任侠道に生きる者としての定めで急遽行くことに決定した。私も誘われたが丁重にお断りし、代わりに大漁を祈願して発泡スチロールの大箱

を用意しますかと尋ねてみる。
　大箱に負けないほどのクーラーを抱え、勇んで雄武沖でのカレイ釣りに向かったが、釣果の方は芳しくなかったらしい。木っ端カレイのみで、お土産にと約束していた黒ガシラの大物は終（つい）ぞ届かなかった。
　大会日前日（海の日２０日）、カナダ屋釣具店でエサの買い出しをしていると、例の我が会で売り出し中の安曽氏がエサを買い込んでいる。見ていると彼もかなりの量である。釣遊会に入会したての頃は、イソメのエサだけでの参加であったのが懐かしく思える。安曽氏は、今大会では嫁に不安が有るので庶野漁港でアカハラを取るという。他の仲間の考えも同じで、庶野漁港や音調津港でアカハラを取り、その後婿を取る作戦を立てているようであった。私は、大物１本だけに狙いを定め、前年度の下見の折に見ておいた谷磯、そして有名釣り場である鬼岩、第２岩、長磯岩、夫婦岩に的を絞って作戦を立てた。

愛すべき仲間たち

　今回の大会には、苫小牧釣友会のメンバーである清野氏（島氏の従兄弟）、長田氏に臨時で参加していただいた。彼らがバスに乗り込んでも違和感は無く、以前からの親しい友人であったかのように会話が弾む。釣りを愛するもの同士という気安さからなのであろう。
　私も話の仲間に加えていただいたが、『北海道のつり』の愛読者であり、「釣れ釣れなるままに」にも目を通していただいているとのことである。私がタカノハを釣ったことに加えて漁師との会話の内容にまでよく記憶していただいていたのには感謝で頭が下がる。また、私の駄文から想像していた人物よりは若いとの言葉に、ご愛想のお世辞であることは分かっていても思わず頬が緩むのであった。
　田中氏、杉尾氏の大長老も参加して下さっていた。自らはお年寄りとは思っていない素振りを見せる彼らと、そういう彼らを大事にしている釣遊会も大好きである。本日は音調津港に入る予定だそうで、アカハラ釣り大会の様相を呈している今大会では熟練の腕前を発揮し、上位に食い込むことは間違いないだろう。

鬼岩のお化け

　バスは快調に襟裳岬を通過し、千平から順次仲間を降ろしていく。
　私は、まず鬼岩の手前の第２岩に入ることにする。いつも釣り人が絶えないということなので、荷物を一旦道路の脇に付いたコンクリートの階段のところに置き、様子を伺いに行く。案の定、他の釣り会のメンバー３名が入っており、正に今、慌ただしく立ち振る舞い、竿をセットしている。その中に女性がいたのには驚いたが、その振る舞う様が男性を圧倒していたように見えたのにはもっと驚いた。トイレはいったいどうするのだろう？男性勝りとは思いたくないのだが（コホン）・・・。
　私が入り込む余地は無く、鬼岩に向かう。やはりここでも、様子を伺うために階段の所に荷物を置いて行く。切り立った崖の縁を歩くが釣り人の気配はない。白い霜が色濃く立

ち込め、辺りの様子が全く分からない。磯に打ち寄せる穏やかな波が確認できるだけでその前方の海原がどのようになっているのか皆目見当がつかない。２０ｍ程前方に見えるはずの鬼岩の姿もない。さらに奥に進み、第２岩で竿を振っている例の３人組のキャップライトが僅かに見え隠れしている所まで行き、誰も居ないことを確認してから引き返して来た。

もう一度荷物を担ぎ直し、岩に張り付きながらよろよろと釣り場に向かう。崖が少し開け、僅かに竿をセットできる程のスペースを見つけた。多分ここが鬼岩の右側の溝に打てる場所だと勝手に堆測して荷物を下ろしほっと一息つく。

暗闇の中でキャップライトの光りに当たった白い霧が不気味さを漂わせている。バスの中で岡氏が「鬼岩ではお化けが出る」と言っていた言葉を思い出す。お化けのような魚なら大歓迎だが、実際のお化けが出たらしい。それも釣り人に関係がある話ということだ。私は怪談話には比較的強く、幽霊よりは生きた人間の方が怖いと思っている方だが、今の状況はいかにも何か出そうな雰囲気が漂っている。

竿２本は目の前にドボンとちょい投げをする。１本は遠投を試みる。遠投した方の道糸を張るといつもより高い位置にあり、かなり遠投できたと思われる。しかし、遠投の竿は根がかりばかりで、どうも海に落ちている気配がない。これもお化けの仕業か。風が少し出て来て目の前の霧を流していった。すると、頭上に鬼岩の勇姿が覆いかぶさってくるように聳えている。こんなにも大きな岩だとは想像していなかった。

さらに右へと移動する。崖の縁に張り付いての釣りになり、足元が不安定である。何とか三脚を設置し、エサを置く場所も確保した。リュック等はさらに離れた高いところに置く。改めて竿を振り込んだ。しかし、鬼岩に遮られて潮通しが悪いのか一投一投にゴミがついてくる。それでもゴミと一緒にハゴトコが何匹か釣れた。さらに嫁にはしたくないようなやせ細った小さなカジカも釣れる。

テリトリー

薄明るくなってきて、辺りの様子が見えるようになると、鬼岩にカモメがニヤーニヤーと煩く集っている。鬼岩を根城にしている奴か、それとも明け方になって飛来したものかは定かでない。

いつものように仕掛けをドボンと投げ込むと、沈んで行くはずのエサがこのときは違っていた。エサを目がけて一羽のカモメが急降下し、海面にダイビングした。海中に首を突っ込んだ後、今落ちたばかりのエサを仕掛けごと足で掴み、引っ張りあげて飛び立とうとする。その足にネットがからまった。背中にゾクツと悪寒が走る。

外れてくれるよう願い何度か竿を煽ったがうまくいかず、さらに絡まりが大きくなったようである。仕方なく引っ張りあげることにする。カモメは盛んに糸を噛み切ろうとガチガチと嘴を鳴らして羽をばたつかせる。それでも何とか岸に寄せると、観念したのか割りとすんなりとこちらの岩に自ら上がってくれた。一旦竿を三脚に立て掛け、カモメに近づ

くと掴まれまいと激しく抵抗する。その反動で三脚が倒れて三本の竿先が海中に落ちていく。しかし、カモメを放っておく訳にもいかず、やっとの思いで取り押さえた。ばたつく羽を押さえながら賂まった糸をほどく。縒り糸であるのでなかなか解けない。ハサミを取り出すと、嘴で私の腕をガツガツと突っ突く。仲間と思われるカモメが近寄りニュアーニュアーと煩く付きまとう。それでも委細構わず絡まった糸をバチバチと切り、ようやく解くことができた。

そーっと海辺に解き放つ。そのカモメは、いっとき、身じろぎもせずにこちらを見据えていたが、私が後退りするのに合わせて、首を真っすぐに伸ばしたかと思うと鬼岩に向かってパシッと羽を翻した。ぎこちない羽ばたきながら、何とか鬼岩にたどり着き、嘴で羽を整えている。周りのカモメは、そのカモメを遠巻きにして、相変わらずニヤーニヤーと煩く泣き喚いている。

傷つけたであろうカモメに心が痛む。普段は、釣り場を離れた一寸の隙に、エサを略奪される憎っくきカモメだが・・・。しかし、私の方がカモメのテリトリーの中に入って釣りをさせていただいているのだ。罪滅ぼしのために、届かないとは思いながらもハゴトコを思いっきり投げてやる。すると、他のカモメが岩から音もなく離れ、ハゴトコが海面に落ちる寸前に嘴でキャッチし、頭から丸呑みにした。何故だかこの時は、カモメの喉の膨らみが下に移動していくのを遠目にもはっきりと見ることができた。

釣り場に戻り、騒動で落下した竿を元に戻すべく１本ずつ上げていく。どれも竿先の道糸から昆布やホンダワラに絡まりそこから切る羽目になる。

おばさんでも怒るよ

昆布取りの舟が一艘近付いて来た。私が投竿している所は作業の邪魔になるような所ではない。打った爆弾に魚が集まって来ている頃だと思うが、カモメの件もあり気分を一新するために移動することにした。荷物を片付け鬼岩を立ち去る。

一旦、ウェィダーから仕事人（靴の内底に仕事人の商品名が入っているゴム製の短靴）に履き替え、谷磯の様子を伺いに行く。一応釣り具もキャスターに載せて移動する。途中、長磯岩には２名が乗っており私が入り込む余地はないようだ。谷磯の方を見ると昆布取りの舟が相当数いる。これから目指す岩の前でも盛んに昆布をとっているようである。

谷磯では高橋氏が竿を出していた。以前、同じところに入った時は３０ｍ程前の横溝の中だけで大物アブラコ４本そろえたことがあるとのことだが、本日はハゴトコのみのようであり奮わない。

昆布巻き上げ機の所で昆布取りの舟を待っているご婦人がいたので、本日の昆布取りの時間を尋ねる。その日の状況によってその時間が変わるということで今日は８時までなのか１０時までなのかは定かでなく曖昧な返事が返ってきた。８時までならこのままここで待機し、磯舟が引き上げた時点で谷磯前の岩に乗ろうと思うのだが・・・。昆布取りの舟がいないところでのちょい投げで時を過ごそうかと思案しながら作業を眺めていると、そ

れを見透かしたように別の恰幅の良い年配のご婦人が
「こんなぬ、たくせぇーん舟が昆布取ってんのに、釣りするなんて、普段は気のええこのおばさんでも怒るよ」
と、厳しい眼差しでおっしゃる。

大物はカモメ２羽

いまだ６時半、一旦、夫婦岩左の平盤に乗ることにして来た道を戻る。ウェイダーに履き替えるのが面倒なので「仕事人」の靴のまま平盤の上をツルツルと滑りながら竿をセットする。沖から夫婦岩の左横に繋がる縦溝が深く切れ込みいかにも大物が棲んでいそうな気配が漂うがハゴトコが２匹来ただけで大きなアタリはない。

煙草をふかしていると遠投した竿に大きなアタリだ。一気に三脚から竿が飛び出して行く。慌てて竿に跳び付き道糸の先を見るとカモメが羽をばたつかせている。鬼岩と同じようにカモメがかかってしまったのだ。まだ首筋に灰色の斑模様を残した若いカモメだ。先程と同じような思いをするのかと憂鬱な気持ちでカモメを引き寄せる。バタバタと羽をばたつかせながら手元まで来たがこいつは幸いなことに何の加減か外れてくれた。安堵の胸を撫で下ろす。

８時、谷磯に昆布取りの舟がいなくなったのを確認し、荷物を片付け、狙いをつけていた場所に向かって歩みを進める。「仕事人」からウェイダーに履き替え、浅くなった潮を漕いで前の岩に渡る。海の状況がすこぶるよい。いかにも何かでそうだ。鬼岩とは違ったお化けのようなものが・・・。８時半、期待に胸膨らませて昆布の中に仕掛けを送り込む。しかし、その願いとは裏腹に何も事件が起こらないまま締め切り時間が来てしまった。本日の大物はカモメ２羽という散々足る悲惨な結末で高橋氏と共に項垂れてバスを待つ。

審査の結果

エリモ町のラーメン屋の前で審査を行った。臨時で参加していただいた長田氏の魚篭からは５１．６㎝のカジカの尻尾が凛として聳え出ていた。目黒漁港右コンクリート階段前での釣果とのことである。清野氏も同じ場所で同じようなカジカを掛けたが、高い胸壁に妨げられてあげ損じたとのことである。機会があれば是非ここに入釣してみたいものだ。

審査の結果は

優　勝	長田　勝	1118 点（カジカ　516 ㎜＋ハゴトコ 259 ㎜＋4430g）	目　黒
準優勝	嵐　光博	1008 点（アカハラ 414 ㎜＋ハゴトコ 285 ㎜＋3090g）	音調津
３　位	島　強二	960 点（アカハラ 366 ㎜＋カジカ　343 ㎜＋2510g）	庶　野
４　位	山岸　伸	902 点（アカハラ 390 ㎜＋ハゴトコ 254 ㎜＋2580g）	音調津
５　位	堀内正博	897 点（アカハラ 377 ㎜＋ハゴトコ 269 ㎜＋2510g）	音調津

であり、私は 602 点で無残な結果であった。

１７位　鹿島釣狂　602 点（ハゴトコ 297 ㎜＋カジカ　178 ㎜＋1270g）　谷磯

長田氏以外は漁港でアカハラを揃えた者が上位を独占した。新聞報道ではこの日、音調津漁港でアブラコもカジカも上がったことを告げている。機会があれば是非この港でも挑戦してみたいものだ。

審査後はラーメン屋で昼食をとったのだが、その女将からピックな副賞をいただいた。今回のラッキーナンバーは１２ということで田中大長老翁（９０歳）が鮭の大物をプレゼントされた。なぜラッキーナンバーが１２番なのかは定かでない。田中長老が１３番ならラッキーナンバーも１３、１４番なら１４になるのだと私は勝手に思っている。また、それが釣遊会のよいところであり私が釣遊会を愛する所以なのだ。

ラーメンを啜っていると北の釣会の審査が行われている。皆、アブラコを１０本揃えている。名人会にも所属する田村氏が岬先端で１１キロもの魚あげて１５００点台で優勝（１匹身長＋１０匹重量）したとのことである。一度でいいからそんな大釣りをしたいものだと塩懲りも無く次回大会に夢を馳せるのであった。

水交社訪問

７月２６日、札幌で会議があり、時間に余裕があったので初めて水交社を訪ねてみることにした。北３３条通りを小樽方面に向かうが、西１８丁目がない。地名が急に変わったので少し進んだ所で横道に入って戻ったが、いつまでたっても西１８丁目が出てこない。八軒辺りをうろうろし、方角が分からなくなり、一方通行の道に迷い込んだりで、とうとう札幌駅近くまで戻る羽目になった。

ダイアパレスの１階の奥まった所に事務所が有り、受付（？）の女性の丁寧な対応で案内された室内は、例のテレビ画面等で映っている雑誌社の如くであった。机上を資料で山積みにしており、雑然とした狭い中で１０名ほどが一心不乱にパソコンに向かい編集作業の真っ最中であった。

投稿記事の連絡等で電話やフワックスをいただていた可愛らしい佐々木さん（下線は編集ですが事実ですのでオホホ・・・）に原稿のフロッピーを手波し、ついでに投稿写真を返していただいた。さらに、漁業権や内水面規制のお話しを伺ったり資料まで戴いたりしたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

「北海道のつり」の原稿締め切り日には昼夜を違わず編集作業に追われているのであろう。取材での釣りができるのを願わずにはいられない。編集長様、チユータさん、ミミオさん、M・K さん、そしてスタッフの皆さん（北海道のつりにはこの方たちしか名前がないので）健康に気をつけて頑張って下さい。応援しています。